



刀根 健

株式会社ヒューマンスキル開発センター
講師／コンサルタント

Takeshi_TONE 1989年東京電機大学理工学部産業機械工学科を卒業，大手商社に営業職として入社。営業職としてコミュニケーションやカウンセリングスキルの必要性を感じ，産業カウンセラーを取得。教育・研修を中心とした業務に専念するため，社会人教育研修企業へ転職。心理カウンセリングとキャリアカウンセリングを統合した独自のカウンセリングの資格取得コースの開発を担当。人事部門に転属し，教育・研修・制度を担当。人事制度の改革や風土改革などのコンサルティングも得意とする。同社を退職し株式会社ヒューマンスキル開発センターへコンサルタント，講師として入社，現在に至る。産業カウンセラー，セルフインテグレーション・サポート・カウンセラー（ベーシック），TAインストラクター（上級）の資格を所持。主な著書に『ストローク・ライフのすすめ』（フォーメクス出版）がある。

優しくて親切 「保護的親 (NP/Nurturing Parent)」

本連載では，TA理論における6つのパーソナリティー分析を基に，それぞれの性格的な特徴が起し得るリスクの可能性をストーリーでまとめてみました。今回は，「保護的親 (NP/Nurturing Parent)」の高い保科看護師のケースです。

1

「自分でできると言ってるだろう！」

我慢していたイライラがついに爆発したような声が響いた。同室の患者やその場にいた看護師たちが，一斉にビクッと声のする方を振り向いた。叫んだのは，この大部屋の病室に入院している初老の患者，中島だった。中島の前には，担当の中堅看護師である保科看護師が，まるで自分が怒鳴られたことが理解できないような表情で呆然と立っていた。

「どうしたんですか？ 中島さん」

保科看護師が気を取り直して優しく尋ねた。

「だから，こんなことぐらい自分でできると言ってるんだ」「いえ…でも，おトイレに行きたい時はナースコールを押していただくように言っていたじゃないですか」

話はこうだ。保科看護師が病室の見回りをしていると，窓際のベッドから歩いてくる中島に出会った。中島は関節リウマチのために入院中だが，症状もだんだんと回復してきており，入院時にはできなかったことがだんだんと自分でできるようになってきていた。

「自分で行く」

保科看護師はそう言う中島を両腕で強引に支えようと，ベッドまで連れ戻した。

「い～え，まだ無理です。危ないですよ」

保科看護師は幼児に向かって噛んで含めるようにゆっくりと中島に言った。

「そんなことはない。午前中だって一人で行けたんだ」

中島がイライラしながら口

を開く。

「また，そんなことを…何度ご説明したら分かっていただけるんですか？ まったくもう」

保科看護師は優しく微笑むと話を続けた。

「いいですか？ 移動の際はナースコールを押していただかないと…」

「だから，もう一人で歩けるんだって」

またイライラした口調で中島が言う。

「い～え，まだお一人で歩くのは無理です」

優しく，しかし遮るように保科看護師が言う。

「無理じゃない。できる」

ふてくされたように中島が言い返す。

「いえ，危ないです。もし転んでおけがでもしたら…」

「転ばん！ 大丈夫だ」

「い～え。まだ，無理です。私が支えます。はい，ゆっくりと立ってくださいますか」

保科看護師はいったん座らせた中島に，再び立つように

促した。

「支えはいらん！」

すぐさま、中島が小さい声で怒鳴った。

「いえ、そういうわけにはいきません」

保科看護師は取り合わない。「いらんと言っとるだろう！」

さらに大きな声で中島が怒鳴り返した。

保科看護師は言葉を無視するように中島の背中に手を伸ばした。中島はぎこちなく後ろを振り向くと、保科看護師の手を払いのけた。

「まあ、痛いすわ。中島さん」

保科看護師が驚いて中島を見た。

「だから、手を出すな！」

「いえ、何度も言うようですが、そういうわけにはいきません」

保科看護師はいたずらをした子どもを叱るように“メッ”

という表情をして中島を見た。

「看護師さん、あんたは僕の気持ち分からないんですか？」

中島が悲しそうに保科看護師を見た。

「…？」

保科看護師は不思議そうに中島を見た。

「自分が好きな時に、好きなように動けない気持ちが…。トイレに行くにもいちいち手を借りなきゃいけない、こんな…こんな情けない気持ちが…」

「分かります、分かりますとも」

保科看護師は優しく微笑んだ。

「じゃあ、俺にやらしてくれ。トイレぐらい一人でいきたいんだ」

中島は頼み込むような口調で言った。

「だめです。転んでおけがを

されては困ります」

「だから、転ばないと言ってらるだろう！ さっきもドクターが自分でできることはどんどん自分でやりなさい、って言っていたらるが」

またイライラした表情に戻った中島が言い返した。

「はい、そうですが、もし転んでおけがでもされると」

「だから、転ばないって！」

「いえ、やはりまだ無理です。私を呼んでいただかないと…」

「だから、何度同じことを言わせれば分かるんだ。自分で行けると言ってるんだ」

「はいはい」

そう言いながら、保科看護師は中島の言葉を無視するように背中に手を伸ばした。そして、ブツブツと文句を言う中島を支えながらトイレに向かった。

2

その日の夜のことであった。中島からのナースコールで夜勤の池田看護師が中島のベッドに向かった。

「ちょっとトイレに連れて行ってくれないかね」

「はい、いいですよ」

池田看護師は立ち上がる中島を支えてトイレに連れて行った。中島の足取りは入院してきた時と比べ、ずいぶんとしっかりしてきた。池田看

護師は少しうれしくなって思わず話しかけた。

「あら、中島さん、ずいぶんと回復されましたね。この分なら、昼間でしたらトイレもお一人でいただけますね」

中島は少し意外そうに池田看護師を見ると、言いにくそうに口を開いた。

「それがね…行かしてもらえんのですよ」

「え…？ と、言いますと？」

「保科さんがね、僕一人では行かしてくれんです」

「まあ、そうなんですか」

「でも、ドクターからは自分でできることは自分でやりましょう、と許可が出ているとお聞きしたのですが…」

「保科さんがね…」

中島はまた、同じことをつぶやいた。

「保科看護師が、何か？」

「ええ、まあ。保科さんが親

切なことは感謝しとるんです。最初の頃はね、何て親切で優しい人だろうって思いましたよ。ああ、白衣の天使っているんだなって」

中島はちょっと照れくさそうに笑った。

「でもね、最近はそれがね…。ちょっとうるさいというか…わずらわしいというか…」

「…わずらわしい…」

「何というか…。自由にさせてもらえないというかね…」

「でも、中島さんはご病気で入院されたんだし…」

「まあ、そのとおりなんだけどね…。でも、ずいぶんよくなったと思うんだ。池田さんも分かるでしょ」

中島はそう言うのと、しっかりと立って両手を広げて見せた。

「ええ」

「保科さんといるとね…いつまでも病人扱いされて、まあ、病人なんですけどね」

中島はちょっと自嘲気味に笑うと、話を続けた。

「何だか、あの人に面倒見てもらっていると、いつまでも自分が病人のままのような気がしてね…」

「まあ…そうなんですか…」

池田看護師は返す言葉に困った。

「こんなこと言っちゃなんだが、僕は元気になっちゃいけないような気がするんだよ」

「え…まさか、そんなことはないですよ」

「僕が元気になって、できることが増えてきても、あの人はそれを先回りして全部やってしまおうとするんだよ。だから、僕はいつまでも病人のままにいたくちゃならない、そんな気がするんだ」

「それは気のせいですよ、中島さん」

「だといいいんだけどね…」

中島は寂しそうに笑った。

* * *

当直明けの引き継ぎが終わった時、池田看護師は保科看護師に声をかけた。

「保科さん」

「はい？」

「実はね、昨日中島さんを夜トイレに連れて行った時、ちょっとお話ししたんだけど…」

「ええ、中島さんが、はい」

「中島さん、昼間だったらもう十分一人でトイレに行けると思うんだけど、どう思う？」

「いえ、まだだと思います」

保科看護師は即答した。

「それは、どうして？」

「えっ、まだ危険だと思いますので」

意外そうに保科看護師が言った。

「そろそろ退院も視野に入れて、自分でできることをさせてあげた方がいいんじゃないかと思うんだけど。ドクターもそう言っていたと思うわ」

「でも…中島さんに関しては担当の私が一番状況が分かっていると思いますので、私が判断します」

「そう。分かったわ」

少し表情を硬くした保科看護師を見て、池田看護師はそう言ってその場を終わらせた。

* * *

「ちょっと気になることがある」と、鈴木師長が池田看護師から呼び止められたのはその次の日のことだった。池田看護師からおおまかな状況を聞いた鈴木師長は思った。「保科さんに話した方がいいかもね。まずはちょっと中島さんの様子を見てこよう」

鈴木師長は病室に向かって席を立った。

3

「保科さん」

日勤と夜勤の引き継ぎが終わった頃、鈴木師長が保科看護師に声をかけた。

「はい」

保科看護師が穏やかに答えて鈴木師長のところへやって来た。

「いつもお疲れ様」

鈴木師長はにこっと笑っていすに座った。

「はい、師長もお疲れ様です」

保科看護師はとても感じがいい。

「ちょっといいかしら。少しだけ時間、大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

保科看護師は鈴木師長にうながされて鈴木師長の斜め前のいすに座った。

「実はね、今日病棟を見回している時に中島さんとお話したの」

「中島さんと？」

「ええ」

「はい…」

保科看護師は少しうかがうような目で鈴木師長を見た。

「中島さん、あなたにとって感謝していたわよ」

「感謝…」

「とても親切で優しい人だってね。白衣の天使って言ってたわよ」

「まあ…そんな…天使なんて…ありがとうございます」

保科看護師はちょっと照れくさそうに、そして嬉しそうに笑った。

「でもね…」

鈴木師長がそう言うと、保科看護師の目が曇った。

「ちょっと、やりすぎだって」

「えっ、やりすぎですか？」

「ええ。私もね、中島さんの

様子を見て思ったんだけど、そろそろお一人でトイレに行かせてあげても大丈夫だと思うの。どう？」

「いえ…でも…」

「ドクターも早く自立するためには、一人でできることを少しずつでも増やしていくことが大切って言ってたじゃない」

「ええ、まあ、そうなんですけど」

「中島さんもね、一人でやりたいって思ってるらしいの。せめてトイレぐらいは一人で行きたいって」

「中島さんがそう言ったんですか？」

「いえ、はっきりそうは言ってなかったけどね、何となくそう感じるのよ。いつまでも面倒を見てもらってばかりじゃ、嫌なんじゃないかってね」

「……」

「やっぱりね、大切なのはね、ドクターの治療方針だと思うのよ。自分でできることは自分でさせなさいってことよね」

「…はい」

「保科さんが優しくて面倒見がよいことはみんな知ってるわ。そこはね、あなたのとてもいいところよ」

「はい…ありがとうございますま

す」

「でも、ちょっと手を出しすぎる時があると思うの。私」

「はい…そうかもしれません」

「患者さんができることは、手を出したくてもじっと我慢することも大切だと思うの。でないと、できることもできなくなっちゃうじゃない」

「ええ、まあ、そうですけど」

「だからね、やってあげたくても、我慢することも私たちの仕事なのよ。患者さんのためにもね」

「はい…」

「中島さんのこと、ちょっと我慢して見守ってもらってもいいかしら？」

「はい…やってみます」

「それでね、やっぱりちょっと無理だったら、サポートしてあげてくれる？ まずご自分でやってみないと、中島さんも気がすまないみたいなのよ」

「分かりました。私、手を出さないで横で見えます」

「ありがとうございます。保科さん、あなたが横にいてくれるだけで中島さん、きっと安心できると思うわ。じゃあ、よろしくね」

「はい！」

保科看護師は元気にナースステーションを後にした。

解説

NP (Nurturing Parent / 保護的親) の高い人の特徴は、優しくて親切、ということです。周囲に困った人がいたら、とにかく親切にし、世話をし、面倒を見ようとします。看護師という仕事は職業柄NPが高い人が多いのも事実です。「看護する」という仕事そのものがこの「NP」のエネルギーそのものズバリの職業だったりもします。

NPの高い人と一緒にいると、とても安らかな気持ちになり、リラックスすることができます。なぜならNPのエネルギーは“人を育て、ケアをする”エネルギーだからです。しかし、このNPがネガティブな側面として発揮されると、保科看護師のように手を出しすぎる、余計なことまでやろうとする、相手の自立の芽を摘んでしまう、ということをしがちになります。つまり、相手を“自立していない子ども状態”と見なして無意識のうちにコントロールしようとしてしまうのです。その結果、相手の人は「自分を不十分だと感じる」「不自由」「甘え／依存」という状態にしてしまいます。今回のケースの中島さんは、自立しようとする強い意志があったために保科看護師との衝突という形で現れましたが、これが依存というエネルギーが強くなると、入院状態が長くなる、自立できない、できることもやらなくなる、といったマイナス面が現れるかもしれません。

「優しい／親切」というNPのエネルギーは、よい人間関係をつくっていくためには絶対に必要です。しかし、これがネガティブに使われると、相手の可能性や成長の芽を摘み取ってしまうということにもなりかねません。NPのエネルギーを使う時には、「あなた（相手）は不十分な存在」という視点でなく、「あなた（相手）はOKな存在だ」という視点からかかわるように意識しましょう。

あなたは
どのタイプ？

今回の保科看護師はNP (Nurturing Parent／保護的親) タイプでした。あなたはどのタイプでしょう？ エゴグラムによる無料自己チェックのアドレスはこちら。
<http://www.human-skill.co.jp/TPS/checklist.html>